GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　54

近代と現代における公共／親密圏の変容と管理

― 新聞・雑誌記事の調査から ―

朝田 佳尚
（日本学術振興会特別研究員）
西川 純司
（京都大学大学院文学研究科博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員）

2011 年 9 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

はしがき

本報告書は、2010 年 4 月から 2011 年の 3 月までの 1 年間に、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の研究ユニットに参加した西川純司と朝田佳尚の資料調査の成果をそれぞれまとめたものである。西川は主に戦前の日本社会におけるガラス受容の過程を、朝田は主に戦後の日本社会における監視カメラの広がりを、新聞や雑誌をはじめとする資料から歴史的に跡付けることを目指した。詳細については報告書の中で展開しているが、その調査と分析の概要を示せば以下の通りである。

第一に、西川は日本の戦前期を対象に、住宅に窓ガラスが採り入れられる過程を分析しつつ、その歴史的な過程を公衆衛生制度の展開およびその受容の局面のもとで考察した。分析の素材には、一般家庭向けの雑誌や専門誌、行政組織の発行する報告書などの資料を選んだ。分析の結果、窓ガラスは、その衛生上の効果を期待されながら、1920 年前後の都市部の住居に、1930 年頃からは農村部の住居に導入することが推進されたのであり、その過程ではこの技術に対する社会的な想像力が大きな役割を果たしていたことが明らかになった（第 1 章）。

第二に、朝田は、現代における監視カメラというテクノロジーの広まりに着目しながら、現代的な空間の管理を分析した。収集したのは、主に国会図書館および大屋壮一文庫で新聞、雑誌、専門誌などの資料である。それらを分析した結果、監視カメラの担い手が国民国家から地域住民に移っていること、また設置箇所が施設内から街路などの開放的で多数の人びとが行き交う公共空間に移っていることが明らかになった（第 2 章）。

本研究ユニットの主な目的は、それぞれの調査研究を進展させることだったが、その過程で相互の研究成果を検討する機会や共通するテキストの読解を行う機会を随時もうけ、分析や研究の方向性に関する活発な議論を行った。それにより、これまでの個別の調査では気づけなかった論点やそれぞれの分析の連続性にも目を向けることができた。

例えば、朝田が検討する現代社会の空間の監視化や管理化という観点を、西川の公衆衛生による親密な領域の可視化という分析に援用すれば、それを近代社会における空間の監視化・管理化のひとつとみなすことができる。また、西川が検討する住居という親密圏を媒介とした公衆衛生の展開という観点を、監視カメラを担う地域社会の登場という朝田の分析に援用すれば、国民国家という公的機関ではなく親密な地域社会が中心となった秩序の生成とみなすことができる。さらには、ガラスと監視カメラといういずれも視覚性に関わる技術は、M. フーコーが指摘するような「テクノロジー」という意味でなら、それぞれを近代と現代における知と実践の作動形式を表すメディアとして連続的に考察できるのではないかというのも、議論の中で示された論点であった。

もちろん、こうした論点や分析の連続性を明確化するには課題も多く、本報告書の各章においてもまだまだ収集すべき資料や検討すべき課題が残る。しかし、掲載した資料は関連する研究分野においては重要だと考えられるものであり、広く公開することに一定の価値があると考えている。本報告書が関連する資料研究の一助になれば幸いである。

2010 年度次世代研究「近代と現代における空間の管理と親密圏の再創造に関する調査研究」（研究代表：朝田佳尚）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2010 年度プロジェクト時点

朝田 佳尚 （京都大学文学部非常勤講師）

西川 純司 （京都大学大学院文学研究科博士後期課程）